

法政大学におけるアスレティックトレーナー活動

IZUMI, Shigeki / 泉, 重樹

(出版者 / Publisher)

法政大学スポーツ健康学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学スポーツ健康学研究 / 法政大学スポーツ健康学研究

(巻 / Volume)

2

(開始ページ / Start Page)

51

(終了ページ / End Page)

56

(発行年 / Year)

2011-03-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007258>

法政大学におけるアスレティックトレーナー活動

Athletic Trainer Activity in Hosei University

泉 重樹¹⁾
Shigeki Izumi

[Abstract]

This study reports on the activity of an athletic trainer in the Faculty of Sports and Health Studies, Hosei University. The athletic trainer activity was studied at a sporting event held on May 27 and October 9. The trainer attended to several sprained ankles at each event, and conditioning such as icing and stretching, etc. was the most required treatment. Enlightenment of trainer activity in universities and the creation of manpower through education are future issues for investigation.

Key Word: student athletic trainer, athletic training, sports injury

キーワード：学生アスレティックトレーナー、アスレティックトレーニング、スポーツ傷害

1. 緒言

アスレティックトレーナーの役割とは多様な側面のあるアスリートのコンディショニングを統合的な視点を持ってサポートすることであり、特に疾病や外傷を予防し、疾病や外傷からのリハビリを助けることが重視される¹⁾。現在のスポーツ界を支える様々な職種のなかで、アスレティックトレーナーは欠かすことのできない職業の一つになってきている。

アスレティックトレーナーが最も早く制度化されたのは米国の National Athletic Trainers' Association (NATA) であり、1950年代のことである。NATAは米国の人気の高い大学スポーツやプロスポーツにおけるトレーナー活動を中心としたものであり、大学における実習活動を中心としており、大学における教育制度の中に明確に位置づけられている¹⁾。日本では1994年から日本体育協会公認アスレティックトレーナー（以下JASA-AT）制度がスタートし、2010年現在、約1500名が資格を取得して活躍している²⁾。

2010年度より法政大学スポーツ健康学部では、

2年生である1期生はヘルスデザインコース、スポーツビジネスコース、スポーツコーチングコースの3コースに分かれ、各々のコースで勉学に励んでいる。同時に2年時より専任教員のもとで各ゼミに所属し（必修ではないものの1期生は95%以上が所属）、少人数制の演習形式の授業において各教員の専門分野を学んでいる。筆者のゼミでは主にアスレティックトレーナーを目指す学生を受け入れ、ゼミにおける発表・実習を含めた学習活動を経て学生時代に学生トレーナーとして活動することを通して、スポーツをする・みる・ささえることを身をもって学び、この経験から将来の自身のキャリアについて考えてほしいと活動を行っている。このアスレティックトレーナー教育において重要な位置を占めるのは「スポーツ現場実習」である。アスレティックトレーナー教育が始まったばかりの本学部内だけでは、実習場所として不十分であることは否めない。そこで今年度から筆者の専門ゼミにおいては、実際に学内におけるスポーツイベントにおいて、アスレティックトレーナーチームとして参加することを通して、学生の実習

1) 法政大学スポーツ健康学部

機会を得ることをゼミの運営方針の一つとしてきた。

本報告の目的は、2010年5月27日に行われた法政大学多摩キャンパス スポーツフェスティバル（以下スポフェス）および2010年10月9日に行われたスポーツ健康学部主催フットサル大会（以下フットサル大会）におけるトレーナーステーション活動の実施内容および結果を報告することで、今後のアスレティックトレーナー教育における基礎資料とすることである。

2. 方法

2.1 トレーナーステーションとは

一般的に医師や看護師が常駐しているスポーツ現場における救護所は、外傷等の評価および応急処置を行う場所である。一方、トレーナーステーションはアスレティックトレーナーが常駐しており、スポーツ現場で起こった外傷等の評価や応急処置を医師との連携のもとで行う。さらにストレッチングやテーピング、ウォーミングアップやクーリングダウンの指導といったコンディショニング全般を担当する。トレーナーステーションは、スポーツ現場の安全管理を含めて幅広い業務を行う場所である。救護所とトレーナーステーションは医師、看護師、トレーナーの連携のもと、一緒に開設させることもある。今回は法政大学における初めての試みとして、救護所とは別にトレーナーステーションを設けてトレーナー活動を実施した。

2.2 活動方針

今回の活動において、トレーナーステーションにはJASA-ATが1名（筆者）のみしかいなかったため、評価および処置（コンディショニング）は筆者が基本的には行っている。ただし教育の進行とともにフットサル大会においては、筆者指導のもと学生が評価およびコンディショニングを実施する場面を多くすることとした。

2.3 対象と方法

活動集計の対象はスポフェス、フットサル大会

とともにトレーナーステーションを訪れ、相談・評価および処置（コンディショニング）を受けた対象者とした。対象者に対して、まず問診さらに評価を行い、その結果から、アイシング、テーピング、ストレッチング指導、手技療法（マッサージ）等の処置を行った。ストレッチングについては必ず、最初にパートナーストレッチにより自身の筋が伸びているという感覚を得られるよう指導を行い、その後時間の許す限り具体的なセルフストレッチングを指導することとした。

2.4 集計方法

スポフェス、フットサル大会ともに、実際に何らかの評価・処置を受けた対象者をコンディショニング記録用紙に記録した上で、集計は後ろ向きに行った。集計は対象者の人数、症状を持つ部位名とその症状、実際に行った処置ごとに行った。部位・症状や処置が複数ある者は、その部位・症状・処置ごとに一件として、延べ人数で集計を行った。

3. 結果

3.1 スポーツフェスティバルの結果（図1）



図1：スポフェス時のサポートの様子

3.1.1 対象者

当日に対応した対象者はすべて学生であった。内訳は経済学部6名、社会学部5名、現代福祉学部1名、スポーツ健康学部5名であり、総数では17名であった（図2）。

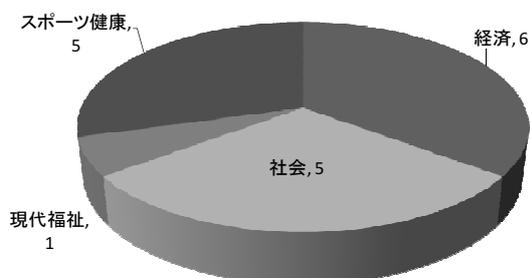


図2：スポフェス被処置者の所属学部

3.1.2 傷害部位

傷害部位は足関節が5名と最も多く、以下手指が3名、下腿後面が2名であり、他は足の指、腰部、膝関節、大腿前面、肩関節、発熱、鼻部（鼻出血）がそれぞれ1名ずつであった（図3）。

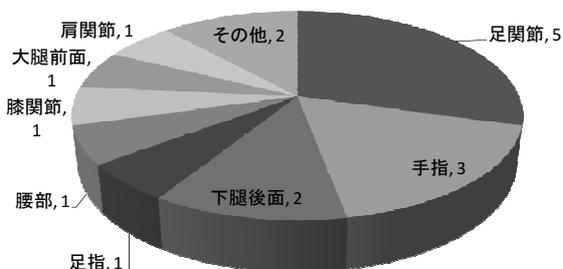


図3：スポフェス被処置者の傷害部位

3.1.3 症状

症状は捻挫が5名と最も多く、以下突き指が3名、原因不明の疼痛が2名、いわゆるこむらえりが2名、その他、打撲、血まめ、発熱、原因不明の鼻出血が1名ずつであった（図4）。

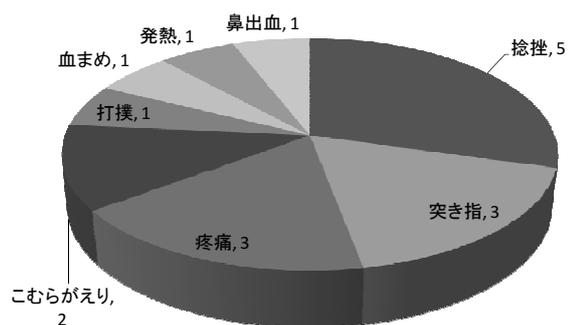


図4：スポフェス被処置者の症状

3.1.4 処置

処置は多い順にアイシングが11名、テーピングが8名、ストレッチングが2名であり、その他、テーピング以外での固定、医療機関への搬送（発熱の為）が1名であった（図5）。

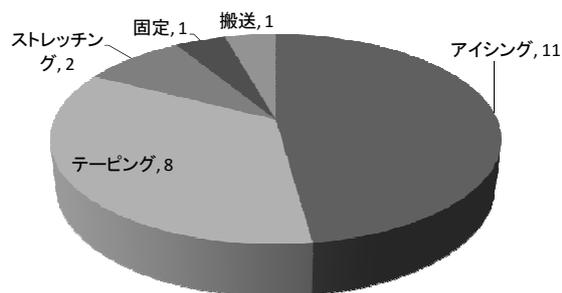


図5：スポフェス被処置者の処置内容

3.2 フットサル大会の結果（図6）

3.2.1 対象者

フットサル大会ではスポーツ健康学部の主催ということもあり、学部教職員がトレーナー活動に興味を持って下さったこともあり、2名の教員が利用者に含まれていた。その他はすべて本学部の学生であった。利用者は合計で12名であった。



図6：フットサル大会時のサポートの様子

3.2.2 傷害部位

傷害部位は肩関節が3名、腰部・膝関節が各2名、その他、足の指、腰部、股関節、足関節、背部、頸肩部がそれぞれ1名ずつであった。(図7)

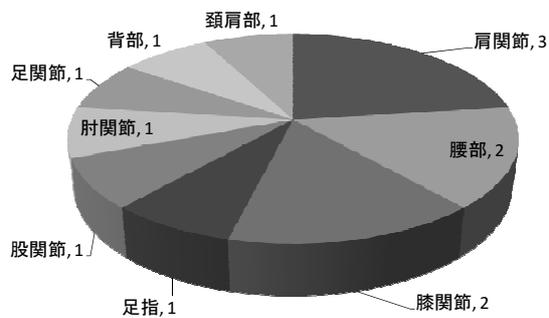


図7：フットサル大会被処置者の傷害部位

3.2.3 症状

症状は原因不明の疼痛が6名と最も多く、筋および関節の違和感2名、筋緊張、筋疲労、捻挫が1名ずつであった。(図8)

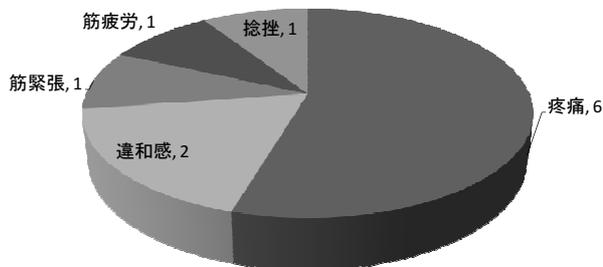


図8：フットサル大会被処置者の症状

3.2.4 処置

処置は多い順にストレッチングが4名、マッサージとアイシングが各3名、テーピングが2名であった。(図9)

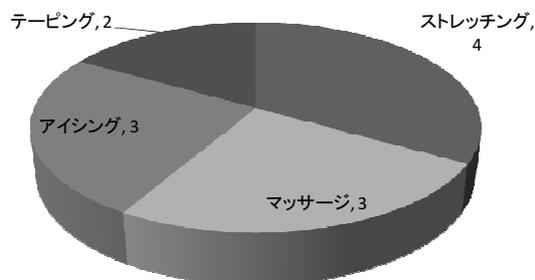


図9：フットサル大会被処置者の処置内容

4. 考察

4.1 トレーナーステーション活動を通して

2010年度に法政大学多摩キャンパス内で行われたスポーツイベントであるスポーツフェスティバル(スポフェス)およびスポーツ健康学部主催フットサル大会にトレーナーステーションを設け、アスレティックトレーナー活動を行った。結果的に利用者はスポフェスで17名、フットサル大会で

12名であった。トレーナー活動自体において利用者が少ないことは、受傷者が少ないということでもあり歓迎すべきことではあるものの、アスレティックトレーナーやトレーナー活動に対して本学の学生や教職員が認知不足のため、利用者が少なかったという点が否めない。今後、学生トレーナーとして活動していく学生たちを通して、少しでも多くの学生、特にスポーツ健康学部の学生には、「アスレティックトレーニング」という分野が「スポーツ」を支えていく上で不可欠な分野であることを、自らの体験を通して学んでほしいと考えている。

5月に実施したスポフェスにおけるトレーナー活動では対象者の問診から評価・処置までをJASA-ATである筆者がひとりで行っていた。ゼミ生である学生トレーナー志望の学生達はこの活動を見学しているだけであった。一方、10月に実施したフットサル大会でのトレーナー活動では、できる限り筆者の指導の下、学生トレーナー達に問診から評価、処置、コンディショニングシートへの記載までを自身で行わせるよう心がけた。

学生トレーナー教育の草分け的存在である国際武道大学の山本は、大学内におけるトレーナー育成システムは、トレーナーを育成するために構築したのではなく、学内のスポーツ選手の医科学サポートを遂行するためのマンパワーとして学生トレーナーの存在が不可欠であったために必然的に生まれたとしている³。本学部が開設以来、本学におけるアスレティックトレーナーとしての活動にあたり、関係各所に対する働きかけなどの事前の活動をしてこなかったことから、トレーナー活動自体の学内での認知不足は否めない。また今回の活動を通して、本学の学内におけるスポーツ医科学サポートの充実のためにマンパワーの充実が不可欠であることは十分に確認できた。

4.2 アスレティックトレーナー教育について

日本におけるアスレティックトレーナー制度（JASA-AT制度）は、もともと様々な資格（鍼灸マッサージ師、理学療法士、柔道整復師、NATA-ATC、

体育学士や修士、NSCA-CPTやCSCSなど）や立場（治療家、アスレティックトレーナー、フィットネスコーチ、フィジカルコーチ、ストレングスコーチ）が混在し、レベル差が大きい日本の「トレーナー」に一定の基準を設けようという考えで始まった制度である⁴。裏を返せば、日本におけるトレーナー自体は様々なバックグラウンドを持ちながら古くから存在し、活動していた経緯がある。JASA-AT資格は現在、約60校の専門学校や大学等で免除適応コースとしてカリキュラムの教育が行われている²。しかしながら資格自体の合格率は低く、資格取得のためにカリキュラムを学んだとしてもJASA-AT資格として卒業時に一回で合格する者は10%以下という現状である。JASA-AT資格取得だけを目指して勉学等に励むだけでは、アスレティックトレーニングという学問を学ぶ意欲は低くならざるを得ない。

アスレティックトレーニングという学問は大変間口が広く学ぶことが多い。外傷・障害の予防、スポーツ現場における救急処置、測定と評価、コンディショニング、アスレティックリハビリテーション（リコンディショニング）、トレーナー（スポーツ）組織の運営、教育などが具体的な内容としてあげられる¹。具体的にいえばスポーツについて広く学んだ上で、解剖学や病理学、外傷・障害、ドーピングに対する知識など医学分野についても広く学ばなければならない。この学ぶ過程を楽しみながら行うためには、学んでいる学生自身が実際に選手達の活動に直に触れて体験する現場実習が最も必要であり、また重要である。将来直接的にしる、間接的にしる、様々な形でスポーツに関わることを希望する本学部の学生にとって、学生トレーナーとしての活動を主体として、学生生活を充実したものにすることは選択肢の一つとして十分であると考えられる。学生トレーナーとして活動した学生達がスポーツ選手のコンディショニングを最良の状態にするためのコーディネーターとして、各方面でスポーツ医科学サポートシステムを構築していくために社会で活動をし続けていくことが、今後の日本のスポーツの発展・充実に必要なこと

であると確信している。

4.3 今後の課題

2011年度からはスポーツ健康学部の日体協公認ATカリキュラムにおける現場実習が本格的にスタートする。2010年度に行ってきた法政大学多摩キャンパスにおけるスポーツイベント参加のようなスポーツ現場での実習活動をさらに学内や学外（地域）へ広げていく必要がある。学生トレーナーチームの運営における重要事項として、先行事例では学内の各運動部との連携、および医師を中心とした学内のスポーツ医科学システムの構築を掲げている^{3,5,6}。この点は本学にもあてはまる。今後は本学部における医師（である教員）を中心としたスポーツ医科学システムの構築と運営が課題になると考えられる。

5. 結語

2010年度に実施した多摩キャンパススポーツフェスティバルおよびスポーツ健康学部主催フットサル大会のトレーナーステーション活動を報告した。今後の課題及び期待は学生トレーナーの存在である。このマンパワーを上手に活用することにより、学生たちのキャリアに対する考え方の深化はもちろんのこと、法政大学における新しい形のスポーツ医科学サポートシステムの構築ができると考えている。

6. 文献

- 1) 日本体育協会編：日本体育協会公認アスレティックトレーナー専門科目テキスト1 アスレティックトレーナーの役割. 日本体育協会, 東京, 第1版, 2007
- 2) 日本体育協会ホームページ:
<http://www.japan-sports.or.jp/coach/data/data.html>, Accessed January 7, 2011.
- 3) 山本利春: 国際武道大学におけるアスレティックトレーナー教育. 国武大紀要, 20, 63-73, 2004
- 4) 山本利春: 日本体育協会公認アスレティックトレーナー制度. 保健の科学. 44: 896-903. 2002
- 5) 泉重樹, 倉持梨恵子, 久米秀作, 清水貴司, 近藤宏, 和田恒彦, 雨宮輝也: 帝京平成大学における学生トレーナー活動の現状と課題, 帝京平成大学紀要, 19, 149-159, 2007
- 6) 山本利春: 国際武道大学におけるトレーナー教育—スポーツトレーナー学科と学生トレーナーチームの現況—. 体育の科学. 54(4): 287-293. 2004.